

## 2015 合同教研 テーマ討論②「18 歳選挙権の実現、私たちはこんな力を身につけたい」

70 年ぶりに参政権が拡大という歴史的瞬間を迎えるにあたって、多くの課題が山積している 18 歳選挙権問題。松代峰明さん（旭川南高）をコーディネーターとして、ともかく若者たちがどのように感じているかを知ることから始めようと企画されました。積極的に 18 歳選挙権実現の意義を語るパネラーの西穂波さんと堀紘子さんの二人は、まったく真逆の高校体験を語ってくれました。管理教育が徹底した高校を卒業した西さんは「自分の思いを発言する場が決定的に足りない」「生徒の自主性が大事なのに教師はいろんなことに口と手を出しすぎる」「生徒たちだけで考える機会が必要」と高校生活を振り返り、参加していた教職員たちをうなずかせました。一方 P T A・生徒・教員で構成する三者懇談会の実践が取り組まれていた高校で生徒会長を務め、生徒たちの力で服装などの規約改正を成し遂げた経験が大きな自信と達成感を与えてくれたと語った堀さんは、学校のなかで自分たちの力だけで何かを変えることができたという体験は、政治や社会や選挙に向き合っていく上で貴重だと指摘しました。両極端の高校生活を送った二人が、18 歳選挙権実現を目前にして自分の頭で考え行動する体験が高校生活で必要だと指摘していることは興味深い一致でした。

その後、「主権者教育をどのように進めるか」「政治的中立性をどのように考えるか」についてフロアーからの発言が続きました。卒業生に「もう一度授業やってくれ」と迫られた中学校の先生は、「どのように生きるかなどあまり考えさせられなかった彼らは、常に是非か正しく判断をせよと迫られてきた」が「18 歳選挙権実現がきまって、いざ投票の時自分に自信がない」、これがそのように頼んできたことの背景だと分析しています。「大人目線、教師目線でなく生徒と一緒に考える機会にしよう」「一人の教師が多様な意見を説明するより、個性の異なる一人ひとりの教員がそれぞれの思いを語ることで、学校が政治的中立を保つことになる」「私たちの心は縛れない」「生徒の前で堂々と自分の考えを語ろう」貴重な意見が続きました。若者も大人も、「私たちはこんな力を身につけたい」と改めて考える契機となるテーマ討論となりました。